第 17 回日本在宅医学会もりおか大会　**一般・指定演題**

（研究報告）抄録用紙

演題名 （全角 80 字以内）	小児在宅支援におけるリハビリテーションに関する調査研究 －支援内容と専門職連携による検討－
演者名	長島史明[1)2)]、原和彦[1)]、久保田章仁[1)]、中川尚子[2)]、 梶原厚子[3)]、前田浩利[3)]
所属	[1)]埼玉県立大学大学院保健医療福祉学研究科、[2)]あおぞら診療所新松戸、 [3)]医療法人財団はるたか会・NPO 法人あおぞらネット

研究方法 （右から番号を選び NO.欄に番号をご記入ください）	1.症例報告　2.症例シリーズ報告　3.コホート研究 4.症例対照研究　5.調査研究　6.介入研究　7.二次研究 8.質的研究　9.その他研究	NO. 5

目的

周産期医療の進歩により、高度医療ケアを要しながら自宅退院する小児が増加しているが、在宅支援サービスは少なく、家族が育児、医療ケアの大半を担うという状況がある。小児在宅リハビリテーション（以下リハ）の現状と課題を明らかにし、病院（以下 HP）と訪問看護ステーション（以下 ST）の支援や連携のあり方を示すことを目的とした。

方法

A 県内の HP のリハ専門職、ST のリハ専門職、看護師（以下 NS）を対象とし、無記名自記式質問紙を HP56 か所、ST240 か所に配布し調査した。調査項目と分析については、HP、ST の小児リハ実施状況と患者・利用者の特徴を単純集計で比較し、次に HP のリハ専門職を A 群、ST のリハ専門職を B 群、ST の NS を C 群とし、支援内容と専門職連携を比較した。支援内容は ICF にもとづく計 20 項目とし、5 件法を用いた。統計処理は、Kruskal-Wallis 検定、多重比較を実施した。専門職連携は 10 職種との実施状況を χ^2 検定、残査分析で分析した。本調査は B 大学倫理委員会で承認を受け、勇美記念財団の研究助成のもと実施した。

結果

回答数は HP32 か所、ST96 か所であった。小児リハは、HP27 か所（84.3%）、ST48 か所（50.0%）が実施、人工呼吸器使用者は ST で多かった。支援内容では、A 群は心身機能・身体構造に関する支援が多く、B 群は A 群の支援に加えて福祉用具など環境因子への支援が多く、C 群は健康状態および環境因子に関する支援が多かった。各群共通して呼吸、摂食嚥下、遊びなどの支援は多かったが、外出、医療および福祉制度への支援は決して多くはなかった。専門職連携では、A 群は病院医師と連携し、C 群は訪問医師、相談支援専門員、福祉職など地域の多職種と連携していた。

考察

小児在宅リハのニーズは高く、HP と ST の各職種がそれぞれの特性を活かしながら、健康維持や発達促進のための支援、専門職連携を実践している。子どもと家族のニーズは成長発達や生活環境の変化により変化しうるため、今後はそれぞれの役割を理解しながら、包括的視野で地域の多職種と連携していくことが必要である。